さわやか

健康
誠実
敬愛

令和6年1月16日　西東京市立田無第二中学校1月号

能登半島地震に思う

校長　矢野　尊久

誰もが新しい年の平穏と多幸を願う元日に石川県の能登半島を大地震が襲いました。午後４時 10 分ごろに発生したマグニチュード 7.6、最大震度７の地震は北海道から九州にかけ広い範囲で揺れが観測され、能登半島を中心に多くの建物が倒壊し、大規模火災も発生しました。能登半島地震で被災されたすべての方々に謹んでお見舞いを申し上げるとともに１日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

私自身、大きな地震に遭遇した経験は東日本大震災の時ぐらいですが、ちょうど小学校で校長職をしていた時で、学校には中、高学年の児童がまだ学習をしていたので、児童の安全や確保や教職員の安全確認、校舎の状況把握など多くのことにパニックにならないように副校長と協力しながら対応していたことを思い出します。幸い大きな怪我等も無く、唯一児童の保護者引き取りに午後７時ごろまでかかったことや、公共交通機関が止まったため、教職員の帰宅について手配し、日付が替わる前には自宅に帰ることができました。（地震後の方が大変だったかもしれません）

さて、ニュース等での能登半島地震で被災された地域の方々の孤立した状況や生活の様子、避難所や自宅で電気や水道、必要な生活物資も今でも不足している様子を拝見していると東京で何不自由なく生活しているありがたさを感じます。この中で水道の止まった地域への自衛隊による給水活動を見ていると個人的な話になりますが、自分自身の小学生の時の頃のことを思い出します。私の生まれは香川県で、ご存じのようにこの地域は雨が少なく、農業用水の確保のために「ため池」という貯水池が昔はたくさん作られ、家庭用の飲み水も慢性的な不足が続いていました。今ではダムなどの整備により水不足はありませんが、私が小学生の頃は、家庭用水道水の供給制限から最後は供給停止によくなりました。そんな時は自衛隊による給水活動が行われていたのです。水不足は必ずといってよいほど夏に起こり、小学生だった私は夏休みということもあり、給水車の来る時刻には近所の給水場所までバケツなどを持って給水を受けに行っていました。暑い中、水の入ったバケツが重かったことをよく覚えています。給水中に自衛隊の方が「小学生なのに頑張っているね」と声を掛けてくれた一言に感動し、とてもうれしかったことを思い出します。今はもう昔話のような経験ですが、このような大変さは当事者でないとなかなか分からないものです。おそらく能登半島地震の被災地の方々の苦労や大変さは、想像を超えているのではないでしょうか。ただ、多くの命を預かる学校としては能登半島地震に学び、災害を想定した避難訓練、事前準備だけでなく、何ができるか考えなければならないと思っています。（学期最初に当たって、副校長を中心に帰宅困難生徒用の水や食料の場所などを職員と確認したりしました）

現在、３年生の第２回目の面接練習をしていますが、「最近の出来事やニュース等で気になったことはありますか」の質問に９割以上の生徒が能登半島地震を挙げ、自分なりの視点で意見を伝えてくれました。始業式に生徒たちに「中学生としてこのような大きな災害について、しっかり関心をもち、自分の考えをもってほしい」と言ったことに二中生として応えてくれていることに一安心しました。

新年の学校だよりは、災害の話題となりましたが、最後に保護者・地域の皆様、今年度も教職員一同、全力で教育活動をすすめてまいりますのでよろしくお願い申し上げます。